

読売俳壇

矢島 渚男 選

馳走はないがと蚊帳を吊りくぐる

【評】民宿の光景か。「馳走はないがと蚊帳を吊りくぐる」とお休みなさい。昭和二十三年代は普通だった蚊帳も今は昔の風物になった。この中に蛍を放したなご親は子に話して聞かせる。いま蚊は極小化した。刻々と地球は傷み夜の雷

町田市 谷川 治

【評】過酷な梅雨で温暖化が一層進んだことを知る。水害や熱中症…人類は他の生物たちを巻き添えに、美しい星を滅ぼすのかも知れない。境内に神輿を洗ふ大盥

熊谷市 白井 正

【評】エッ、タフライでミコシを洗う珍しい情景に出会った。神輿の小ささ、盥の大きさが気になる。どっかりと夏が居座る嘉手納の街

高松市 島田 章平

溶接や汗拭つてもぬぐつても
早苗養や馬鍬は納屋に古りまさり
小田原市 木村のり子

巢燕の賑わう木造村役場
千葉市 笹沼 郁夫

ねじ花の庭に一つや左巻き
生駒市 中谷たかこ

炎天下托鉢僧の皺深し
千葉市 目羅 義明

ゆるり近づけばゆるりと青大将
大月市 米山 明博

宇多喜代子 選

日盛りを出てゆく優柔不断かな

【評】日盛りに出て行かぬはならぬ用があるのだらう。それにしてもこの暑さ。さていつしたのか、ああ思いつく思いつく日盛りに出て行く。目高の子数へ切れなくなりけり

東大阪市 渡辺美智子

【評】目高を飼った人であればまことこの通りだと声を上げたくなる句。ていつらな特徴もない目高、動き回るそんな目高を数える術がない。校門のそばにひまわり中学校

西宮市 高崎なほみ

【評】学校の門のそば、校庭には季節を表す植物がよく植えてある。この中学校では校門のそばにひまわりがある。平凡な風景ながら子供達には、親しみのあるひまわりだ。竹林の光の影の涼しきよ

東京都 杉中 元敏

白シャツや助走をつけて雲に乗る
宇都宮市 松広 訓

地下足袋のまま庭師の端居かな
さいたま市 鈴木 栄一

石段の多き大社の茅の輪かな
秋田市 斉藤 千哲

海に来て七月の母思ひ出す
上尾市 中野 博夫

紅花に明るき雨の沁みてをり
加古川市 東田 強

解体の進む隣家や梅雨最中
伊万里市 田中 秋子

正木ゆう子 選

見えぬ側の君に会ひたし振り花

【評】やや甘めではあるが、季語によつて奥行きのある句に。螺旋状に小さな花を付ける振り花が、君の複雑さ、君とのデリケートな関係を物語る。振り花の正面は何処。湯餅を進む天かすと玉子入れ

大網目市 滝沢ゆき子

【評】季語「湯餅を進む」の句はたぶん当欄で初めて。極暑の時期に熱いうどんを食べる中国の風習。天かすと玉子の具体性で、身近な句に。行きずりに七夕竹の短冊見

横浜市 小野寺 洋

【評】三好潤子の「行きずりに聖樹の星を裏返す」の本歌取りか。クリスマスツリーが七夕竹に変わったこの句も、よくある場面面白。リモートで逢う七夕のハイボール

町田市 枝沢 聖文

一回転しさうな胡瓜もらひ来る
東京都 大岩 真理

雨蛙昨日の声に勝る声
榎原市 城 恵巳子

作つてはみましたが鰻のカレー
栃木県 ありあひこし

空き家から被さつてくる臭木かな
埼玉県 矢内とさ子

日落ちて未だ明るし業平忌
旭市 斉藤 功

自由研究蟻地獄成長記
江別市 北沢多喜雄

小澤 實 選

セザンヌのモデルに疲れ屋寝覚

【評】屋寝の夢の中で、なんと画家セザンヌのモデルをやっていた、というのだ。たしかに巨匠セザンヌは気難しそうで、気疲れしそうだ。絵が好きなのは、こんな夢を見るのか。純喫茶パフェのパナナの斜め切り

大津市 星野 暁

【評】純喫茶がなつかしい、昭和の匂いがする句は、パナナパフェを頼むと、パナナが斜め切りされて出てきた。この具体性が魅力だ。「かぶとむしだつそう」と書く日記かな

伊勢市 藤田ゆきまち

【評】この表記、用語、用字から、この夏休みみの日記の書き手は、小学生だろうと想像できる。悲しみを押し殺して、書いたのだらう。一本に三つの菖蒲台一本

高山市 直井 照男

鮎釣りの一人胸まで浸かりけり
京都市 足立 紀子

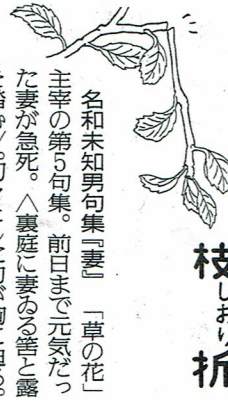
片陰の地べたに座る少女たち
朝倉市 深町 明

打ち水に溺れる蟻と逃げる蟻
埼玉県 小町 季生

夜祭のフレンチドッグ売る係
千葉市 三好 康雄

梅雨明けの猫とあえず伸びをする
静岡市 山本 正幸

拳ほどの一つを挽いて茄子終はる
京田辺市 加藤 草児



枝しおり折

名和未知男句集「妻」「草の花」主宰の第5句集。前日まで元気だった妻が急死。△裏庭に妻のるる露を踏む▽切々とした句が胸に迫る。(文学の森、2970円)

高田正子著『日々季語日和』俳句エッセー。例えば「大きな木大きな木陰夏休み」(宇多喜代子)は、蟬の声に続き、駆け回る子供たちが見えてくると書く。鑑賞のヒントに。(コルサック社、2200円)

永田紅歌集『いま一センチ』第5歌集。妊娠から出産、子育ての日々を詠む。△女の子のような気がする。速いむかし豆を刺さつた母は言ひたり▽。△母・河野裕子の不在も大きい。(砂子屋書房、3300円)

吉田隼人歌集「霊体の蝶」 角川短歌賞、現代歌人協会賞受賞歌人の第2歌集。洗練された文語体で彼岸への憧れを歌う。△靈魂と称はれてあをき鱗粉の蝶たまたへり世界の涯の▽。(草思社、2420円)



題字デザイン・イラスト 福田美蘭